

次の
I の問題は、「国語(1)」の受験者、および「国語(2)」の受験者に共通の問題です。(解答番号は 1 ～ 20)

I 次の文章を読み、後の問い(問一～問十)に答えよ。(60点)

本来、家族と共同体は成立原理が違う。家族は互いに奉仕し合う組織で、自分が何かをしてもお返しする必要がない。しかし共同体は何かをしてもらえば何かの機会にお返しをしなければならない。だから家族と共同体のあいだで、ときとして相反することが起こる。

¹ゴリラとチンパンジーはそれぞれ一つの集団しか持っていない。ゴリラは家族的な一つの集団であり、チンパンジーは家族のない共同体的な集団で、家族と共同体の二つを両立させていないのだ。

しかし人間はこの二つを両立させることができた。平等性、あるいは条件的平等性という、互いに対等な立場で付き合える社会性をつくり、持続してきた。その社会力が非常に強かったがゆえに、人類は一八〇万年前にアフリカ大陸を出て広大なサバンナを渡りユーラシア大陸に到達できたのだ。
ア、アジアやヨーロッパへと広がっていった。この社会力は平等性を備え持った共感力によって支えられていたのである。人間の本性は共感力にあったのだ。

共感力が強まれば強まるほど、人々は仲間を思いやる気持ちが強くなるはずだ。それなのになぜ戦争のような悲劇を起こすことになったのか。

原因の一つとして、農耕牧畜のために定住生活を始めたことを指摘したが、真の原因はその前にあった。

これまで繰り返し述べているが、戦争の起源にあるのは言葉の持つ類推、比喩、アナロジーだ。言葉は世界を、集団の外と内を切り分けた。集団の仲間を思いやるがゆえに集団の外に敵をつくっていく。狩猟採集による移動生活の時代は、お互い違う場所へ移動していけば取り合いにはならなかった。

イ 農耕牧畜によって定住が必要となり土地にしがみつくようになる。自分たちの共同体が努力して得た利益を守ろうとし、外の人たちを敵視するようになる。敵視は言葉によって

A す

る。オオカミのように陰險なやつだと、人間ではないものになぞらえる。このアナロジーによって簡単に相手を敵視できるようになり、本来なら敵ではないはずの人間を敵とみなすようになった。¹ **ウ** 最初は勝つか負けるかという解決法ではなく、調停もできたはずだ。それが個体の利益だけではなく、国家の権威や利益に結びつくようになって、後戻りできなくなっていた。

エ 戦争の起源は「共感力の暴発」でもあるのだ。

それまで共同体が生き延びるために使われ、発達もしてきた共感力が、方向性を変えて敵意となって、外に向けられるようになった。ときには集団内の結束が必要なときにあえて敵をつくりだすこともあっただろう。

アメリカでもヨーロッパでも、映画で最も多いジャンルの一つが戦争映画である。国内の秩序が乱れた際、外に敵をつくりだすのだ。その敵に向かってみんなが結束する。そのことを為政者はよく心得ているから、国策として戦争映画をつくらうとするのだ。

類人猿の時代には、身体的な不平等があれば条件をつけて平等にしていたのに、現代人はその記憶をすっかり忘れている。この平等な社会は、ある集団の中だけではなく集団の外にも広がっていた。ホモ・サピエンスは、言葉を使い始めてから、言葉を情報のツールとして用いて、集団間で様々なものやりとりをしたり、あるいは交流したりしながら、戦争のない時代を過ごしていた。集団同士も対等で、別の集団に対する敵意もどこかで解消されていた。仲間に上下関係をつけたり、ある集団が他の集団を支配したりすることも起こらなかった。長い間、そのような生活こそが人間性として自然なことで、助け合いこそが、人間の進化のプロセスの中で当たり前の社会性だったのだ。

しかし、あるときから自分たちの集団の利益を拡大するために、他の集団を追いやる、あるいは他の集団を支配するようなことが起こってしまった。

人類は狩猟採集生活から農耕生活に移り、家畜をつくった。

農耕牧畜の文明史と農耕のみの文明史では、明確な違いがある。それは奴隷をつくった文明とつくらなかった文明であるこ

とだ。同じ人間の中で格差をつけ、権力を持つものによる支配を前提につくられてきた近代までの文明は、人類が目指した社会とは違うものではないか。

アメリカではメリトクラシーと呼ばれるが、能力のある者が社会的に高い地位を得るのはある意味で当然の話である。その能力を高めるために誰もが教育を受け、成功者を称賛する。アメリカの憲法は、人々が幸福を求める権利を認めている。しかし自発的に幸福を求めない者は権利を放棄したとみなされてしまう。それは人類が目指してきた、誰もが平等、対等な立場で格差をつくらない、あるいは権力を登場させない社会のつくり方とは大きく違うように思える。

人間の社会において、文化と文明は何が違うのか。

文化は権力を必要としない。文化を維持する権威はある程度必要かもしれないが、権力を行使する政治組織は必要ない。しかし文明を築くには権力や政治組織が必要となる。その力で **W** は広がっていく。

一方、**X** は広がらない。その土地の特性と結びつき、人間と土地、気候などの環境との関わり合いによって生活習慣として出てくるものである。**Y** は一定の様式を、**Z** を超えて普及させる。その結果、文明は都市を出現させた。

現在では、世界の人口の半分以上が都市に暮らしている。

そして今、これまでは異なった出自の文明が現れ始めている。

情報通信機器の発達であらゆる情報が世界に浸透し、人々の衣食住に大きな影響を与え始めている。そこに権力の行使はない。しかし人々の欲望を駆り立てる情報によって、世界は **B** し、文化は消えつつある。

iii 情報通信機器によるプラットフォームが世界を制する現代は、権力の在り処^あがわかりにくくなった。しかしそこには非常に大きな力が働いている場合がある。情報を集め、情報を操作して利用しようとするIT企業は公的な権力組織ではない。だが、その情報に接することのできない人たちはハイジ^aョされていく。あるいは悪意を持った人々がSNSなどを悪用して意図的に誤情報を流し、世論を誘導することさえある。

現代の社会では、これまで想像もしなかった形で不平等が生まれている。情報通信機器が様々な文化のあいだをフラットに

つなぐことで、そこに見えない権力が生じ、階層ができる。世界は見事に、情報文明による中央集権的な社会となったのである。

これまで人類は、対面で付き合い、目の前にいる他者に配慮することによって平等性をつくってきた。土地の特性に合わせて不平等が生じないよう工夫してきた。

ところが情報の大流通によって、文化は消失した。これまで不平等をなくすためには権力を倒せばよかったが、現代ではその権力が見えにくくなった。これが今、⁴直面している大きな危機なのだ。

人類は共感力の方向性を誤ったがゆえに、闘争と暴力が支配する社会を^bジョチョウしている。

哺乳類と霊長類と人間の死亡率を比較し、集団間の暴力によって死亡した一〇〇〇人あたりの人数を計算したところ、哺乳類に対し霊長類は数倍高い死亡率だったという論文が、二〇一八年に「ネイチャー」誌に発表された。その理由は、霊長類が集団でなわばりを構えて敵対する傾向が強いからと見なされている。

人類の^cソセンも、今から五〇〇〇年前までは他の霊長類と同様の比率だった。それが五〇〇〇年から三〇〇〇年前、巨大文明が現れた時代に^dイッキに変動し、死亡率は一〇倍以上に急上昇している。

農耕牧畜が登場した際、集団間の暴力は増えたが、初期の暴力の増大は大きくなかった。その後、農耕地が拡大して支配と被支配の構造が生まれ、君主制が登場して巨大文明が生まれ、暴力は激増した。そしてその直後に世界三大宗教が生まれる。キリスト教、イスラム教、仏教だ。まさに人間の文明による暴力を解釈し、それを軽減しなくてはならない時代が到来したのだ。

繰り返しになるが、暴力や戦争は、人間の本性ではない。言葉によって人間がつくりあげてしまった虚構なのだ。⁵人間の共感力はその虚構を強固なものにしてしまった。虚構が敵対意識をつくり出し、暴力を^cしてしまっただ。

(山極壽一『共感革命 社交する人類の進化と未来』による)

注 農耕牧畜のために定住生活を始めたことを指摘した——筆者は本書の中で、農耕牧畜によって定住生活をするようになる、**「領土」**が生まれ、ずっとその中で暮らすようになるために領土内の人々の間でしか共感が通じなくなることや、人口が増えて領土を広げなくてはならなくなると他の領土を奪うための武力行使が必要だと考えるようになることを指摘している。

メリトクラシー——能力主義。人間の評価は、身分や家柄などではなく、本人の能力や業績によってなされるべきであるという考え方。

「ネイチャー」誌——一八六九年に創刊されたイギリスの科学雑誌。世界で最も権威のある科学雑誌の一つ。

問一 文中の二重傍線部（a～d）のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a ハイジヨ

- 1
- ① 春の気ハイが感じられる
 - ② 彼のハイ信行為に失望する
 - ③ 部長職をハイ命する
 - ④ 工場のハイ液を処理する
 - ⑤ 有害物質をハイ出する

b ジョチヨウ

- 2
- ① 自ジョ伝を記す
 - ② 彼は倫理観が欠ジョしている
 - ③ 相互扶ジョの精神を学ぶ
 - ④ 交差点ではジョ行する
 - ⑤ 長幼のジョを重んじる

c ソセン

- 3
- ① この店は串カツ屋の元ソだ
 - ② 彼の仕事はソ雑だ
 - ③ 大学の学部を改ソする
 - ④ 社会の発展をソ害する
 - ⑤ 他国の領土をソ借する

d イツキ

- 4
- ① 商品の納キを守る
 - ② 彼は新進キ鋭の作家だ
 - ③ ドルやユーロはキ軸通貨だ
 - ④ 注意を喚キする
 - ⑤ キ先を制して攻勢に出る

問二 文中の波線部（i～iii）の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- i 調停
- 5
- ① 双方が互いに要求を出し合って妥協点を探ること
 - ② 対立する両者の間に入って争いをやめさせること
 - ③ 根本的な解決法が見つかるまで交渉を中断すること
 - ④ 争いの原因を両者で確認して理性的に対処すること
 - ⑤ 第三者を巻き込むことで結論を有耶無耶にするうやむやこと

- ii 出自
- 6
- ① 性格
 - ② 規模
 - ③ 起源
 - ④ 方向
 - ⑤ 歴史
- iii プラットフォーム
- 7
- ① 物事の出発点
 - ② 一元的な価値基準
 - ③ 最新のテクノロジー
 - ④ 定型化された形式
 - ⑤ システムの基盤

問三 文中の空欄（ア～エ）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

- 選んではならない。ア 8、イ 9、ウ 10、エ 11
- ① また
 - ② だから
 - ③ あるいは
 - ④ そして
 - ⑤ それでも
 - ⑥ ところで
 - ⑦ ところが
 - ⑧ まして

問四 文中の空欄（A～C）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。A 12、B 13、C 14

- ① 抽象化
- ② 均一化
- ③ 客観化
- ④ 大衆化
- ⑤ 恒常化
- ⑥ 正当化
- ⑦ 顕在化
- ⑧ 単純化

問五 文中の傍線部1（ゴリラとチンパンジーはそれぞれ一つの集団しか持っていない）とはどういうことか。その説明とし

て最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。 15

① ゴリラは家族的、チンパンジーは共同体的という違いがあるが、いずれも一つの集団で独立しており、他の集団と交わることはないということ。

② ゴリラは互いに奉仕し合い、チンパンジーはお返しをすることで、他の集団との間で協力し合い、一体的な関係を形成しているということ。

③ ゴリラは互いに奉仕し合う一つの集団のみを構成し、チンパンジーは何かの機会にお返しが必要となる一つの集団のみを構成するということ。

④ 人間は家族的な集団と共同体的な集団を両立させるが、ゴリラとチンパンジーの集団は共同体の中に家族的な性格を含み込んでいるということ。

⑤ ゴリラは一つの家族的集団に、チンパンジーは一つの共同体集団に生まれながらにして組み込まれ、生涯一つの集団の中で過ごすということ。

問六 文中の傍線部2（オオカミのように陰険なやつだ）という表現には直喩が使われているが、次の(1)～(5)の中で直喩が使

われている表現はいくつあるか。最も適当なものを、後の選択肢の中から選べ。

16

- (1) 理不尽な命令に怒りがふつふつとこみ上げてきた
 - (2) 失恋による心の傷がいつまでも癒えない
 - (3) 素晴らしい未来が私たちに手招きをしている
 - (4) 人生は重い荷物を背負って山を登るのに似ている
 - (5) 甲子園にあと一步及ばず涙を呑んだ
- ① 一つ ② 二つ ③ 三つ ④ 四つ ⑤ 五つ ⑥ 一つもない

問七 文中の傍線部3（人類が目指してきた、誰もが平等、対等な立場で格差をつくらない、あるいは権力を登場させない社会のつくり方とは大きく違う）とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

17

① 為政者が戦争映画を利用し、人々が好んでそれを見ていることからわかるように、アメリカ社会では能力のあるものが他を支配するのが当然と考えられており、それは人類が目指してきた格差のない社会を目指す考え方とは相容れないということ。

② アメリカのように個人の才覚によって家柄などには関係なく幸福を実現できる社会もあるが、現在でも多くの国では権力を持つ者が他の人々を支配しており、人類が長い歴史の中で目指してきた平等が実現されている社会はほとんどないということ。

③ 能力の高い者が成功し称賛されるアメリカ社会も、農耕牧畜文明の中で奴隷を酷使してきた歴史があり、現在においても野菜を売ったり牛の世話をしたりしている人々が知性のない者として権力者から不当にわとし貶められることのある格差社会だということ。

④ 自らの能力を高めて成功をつかみ取ろうとしない者を切り捨ててしまうアメリカ社会のあり方は、人々の間の格差を是認するものであり、互いに思いやり対等な立場で接することで成り立っていた、本来の人間社会のあり方とは異なるものだということ。

⑤ アメリカ社会では、誰もが能力を高める教育を受け、能力のある者が高い地位を得るのを当然とする考え方が広まっているが、人種や貧富の差によって生まれながらにして受けられる教育に格差があり、平等の実現にはほど遠い状態にあるということ。

問八 文中の空欄（W～Z）には、それぞれ「文化」「文明」のいずれかの語が入る。空欄（W～Z）を補うのに最も適当な組み合わせを、次の選択肢の中から選べ。

18

- | | | | | | | | |
|---|----|--|----|--|----|--|----|
| | W | | X | | Y | | Z |
| ① | 文明 | | 文化 | | 文化 | | 文化 |
| ② | 文明 | | 文化 | | 文明 | | 文化 |
| ③ | 文明 | | 文化 | | 文化 | | 文明 |
| ④ | 文化 | | 文明 | | 文明 | | 文化 |
| ⑤ | 文化 | | 文明 | | 文化 | | 文明 |
| ⑥ | 文化 | | 文明 | | 文明 | | 文明 |

問九 文中の傍線部4（今、直面している大きな危機）とあるが、この「危機」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

19

- ① 情報通信機器の発達によってあらゆる情報が瞬時に世界中に伝えられ、土地の特性による文化の違いも意味をなさなくなつたため、権力を持つ者は情報を操作することで世界を支配できるようになつていくこと。
- ② 人間は目の前にいる他者には思いやりを持つて接することができるが、情報通信機器でつながっているだけの相手に対しては酷い言葉を使いがちになり、暴力と闘争が支配する社会を生み出してしまふこと。
- ③ 正しい知識を持つて情報通信機器を使わないと誤情報に惑わされたりすることもあるため、現在では情報を扱う個人の能力や知識の差異によって人々の間で深刻な不平等が生じる事態となつていくこと。
- ④ もともと霊長類はなわばりを作つて他者と敵対する傾向が強いが、情報通信機器の発達により他者とのつながり方が変化した現在の人類においては、集団間の暴力で死亡する危険性がより高まつていくこと。
- ⑤ 情報通信機器の発達によりあらゆる情報が広がることで、人々は何に支配されているかがわからないまま情報によってコントロールされ、その状況の下で生じる不平等を解消するのが難しくなつていくこと。

問十 文中の傍線部5（人間の共感力はその虚構を強固なものにしてしまった）とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

20

① 言葉には集団の内と外を切り分けて外への敵意を生み出す力があるが、言葉のそのような力はもとから備わっているものではなく、人間が農耕牧畜のために定住をしていく中で、自分たちの集団の外に敵を作ることによって集団内の仲間を守ろうとする共感力の暴走によって生み出されてしまったものということ。

② 農耕牧畜によって定住生活をするようになると、集団間の暴力は増えたもののその増え方は大きくなかったが、世界三大宗教のキリスト教、イスラム教、仏教が生まれると、宗教観の違いから、共感力は同じ宗教の信者の集団内だけのものとなり、異教徒に対する暴力が激しく増大してしまったということ。

③ 人間の共感力は平等性を備えて仲間を思いやるものであったが、定住生活が始まり自分たちの集団の利益を守ろうとするようになると、本来は敵ではないはずの外の集団を言葉の力によって敵と見なすようになる意識が高まり、他の集団への暴力に歯止めがきかなくなってしまうということ。

④ 仲間を思いやる共感力によって人間は社会を作ってきたが、現在のように情報通信機器が発達すると、土地の特性によって異なる文化を持っていた人々がその違いを無視して一つにつながることで、そのことによって共感し合えない相手に対する暴力を生み出すようになってしまったということ。

⑤ 狩猟採集生活をしている間は軽微なものにすぎなかった他の集団への暴力と支配は、人間が定住生活を始めて文明化されていく中で、集団の仲間を思いやる共感力が強すぎるがゆえに言葉によって他の集団を敵視していくようになり、闘争と暴力が支配する世界を生み出してしまったということ。

次の
II の問題は、「国語(2)」の受験者が解答してください。(解答番号は 21 ～ 40)

II 次の文章を読み、後の問い(問一～問十)に答えよ。(40点)

今は昔、比叡の山に僧ありけり。いとたよりなかりけるが、「鞍馬に七日ばかり参らん」とて参りけり。「夢などや見ゆる」とて参りけれど、見えざりければ、「いま七日」とて参りけれど、なほ見えざりければ、また七日延べて参りけれど、なほ見えねば、七日を延べ延べして百日参りけり。その百日といふ夜の夢に見るやう、「我はえ知らず。清水へ参れ」と仰せられければ、明くるより京に下りて、清水へ参りありく。百日参りて後に、「えこそ己れにたより付く」**A**。賀茂に参りて申せ^bと仰せられければ、また賀茂に参りて、七日ばかりと思へど、「例の夢見ん例の夢見ん」と参りありきけるほどに、百日といふ夜の夢に、「わ僧がかく参るがいとほしくて。ありきてただにあらん、いとほし。御幣紙、打撒きの米ほどの物、たしかに取らせむ」と見て、うち驚きたる心地、いといと心うく、あはれにかなし。「所々かくのみ仰せらるる、打撒きの米の代りばかり給ひて、何にかせん。我、京へ帰らで、山へ登らんも人目はづかし。」**2**賀茂川にや落ち入りなまし」と思へど、また、さすがに、「いかやうにせさせ給ふべきにか」と、ゆかしくおぼえけり。

さりとてあるべきならねば、もとの所に帰りてゐたるほどに、我が知りたる所より、「物申し候はん」と言ふ人あり。「誰そ」とて見れば、白き長櫃^{ながびつ}をになはせて、縁に置きて帰りぬ。「いとあやし」と思ひて、使尋ぬれど、おほかたなし。これを開けて見れば、白き米とよき紙とを、一長櫃入れたり。「これは見し夢のままなりけり。さりと、『おのづから異たよりもや』とこそ思ひつれ、ただこればかりを、まことに返し賜びたる」と、いと心うく思へど、「いかがはせん」とて、この米をよろづに使ふに、ただ同じ多さにて、失することゆめになし。されば、紙も米も、おぼしきに取り使へど、失することなく、同じ多さなれば、別にいときらきらしからねど、いとたのしき法師にてぞありける。なほ物詣ではす**B**なり。

(『古本説話集』による)

注

鞍馬——鞍馬寺。鞍馬山（現京都市左京区）にある寺院。本尊は毘沙門天^{びしゃもんてん}。

清水——清水寺。京都の東山（現京都市東山区）にある寺院。本尊は十一面観音。

賀茂——賀茂神社。賀茂神社は上賀茂神社（現京都市北区）と下鴨神社（現京都市左京区）の総称。本話ではどち

らか不明。

御幣紙、打撒きの米——いずれも神にお供える物。

さりと、——「ここでは」さりと「や」さりと「など」と同意。

問一 文中の破線部（ア～ウ）の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

ア いとほしくて

- 21
- ① 気の毒で
 - ② 好ましくて
 - ③ 望ましくて
 - ④ 重荷で
 - ⑤ 迷惑で

イ ゆかしく

- 22
- ① 不安げに
 - ② 知りたいたと
 - ③ 悲しく
 - ④ 誇らしく
 - ⑤ 物足りない

ウ おのづから

- 23
- ① なんとということもなく
 - ② ひとりでに
 - ③ ひよつとしたら
 - ④ ゆくゆくは
 - ⑤ なにかしら

問二 文中の波線部 a（仰せ）、b（申せ）、c（賜び）の主語として最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。

ただし、同じものを繰り返し選んではならない。 a

24

b

25

c

26

① 比叡山の僧

② 鞍馬寺の仏

③ 清水寺の仏

④ 賀茂神社の神

⑤ 紙・米を持ってきた使

⑥ 語り手

問三 文中の二重傍線部 (i・iii・v) の〈し〉の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。

ただし、同じものを繰り返し選んではならない。 i **27**、iii **28**、v **29**

- ① 四段活用動詞の一部
- ② サ変動詞
- ③ 形容詞の一部
- ④ 過去の助動詞
- ⑤ 推量の助動詞の一部
- ⑥ 比況の助動詞の一部
- ⑦ 助詞の一部

問四 文中の二重傍線部 ii〈られ〉、iv〈に〉、vi〈つれ〉の助動詞の意味と活用形との組み合わせとして最も適当なものを、

それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んではならない。 ii **30**、iv **31**、vi **32**

- ① 断定・未然形
- ② 断定・連用形
- ③ 完了・連用形
- ④ 完了・已然形
- ⑤ 受身・未然形
- ⑥ 受身・連用形
- ⑦ 尊敬・連用形
- ⑧ 尊敬・已然形

問五 文中の空欄 (A・B) を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。 A **33**、B **34**

- ① べし
- ② べき
- ③ べかり
- ④ べけれ
- ⑤ まじ
- ⑥ まじき
- ⑦ まじかり
- ⑧ まじけれ

問六 文中の傍線部1〈心うく〉とあるが、僧がそのような状態になった理由として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

35

- ① 長期間にわたって祈り続けたのにもかかわらず、どここの仏神からも無視されてしまったから。
- ② 神様に何日もお祈りしたかいがあつて、自分の窮状を救ってくれそうな言葉がもらえたから。
- ③ お祈りをしてでも仏神にたらい回しにされたため、これ以上のお祈りをする気力が失せたから。
- ④ 神様から言葉をもらえたけれども、その内容は自分の期待したほどのものではなかったから。
- ⑤ 神様からの言葉は確かなものではなかったが、これから起こることに希望が見えてきたから。

問七 文中の傍線部2〈賀茂川にや落ち入りなまし〉の解釈として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

36

- ① 賀茂川に飛び込んでしまおうか。
- ② 賀茂川に飛び込んでしまうのが一番だ。
- ③ 賀茂川に飛び込んでどうにもならない。
- ④ 賀茂川に危うく転落するところだった。
- ⑤ 賀茂川に転落してしまいそうだ。

問八 文中の傍線部3（白き米とよき紙とを、一長櫃入れたり）とあるが、「白き米とよき紙」はその後どうなったか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

37

- ① 期待したのとはほど遠い物だったので僧は不満だったが、どれほど使っても、まったく尽きることがなかった。
- ② 期待もしていなかったので僧は神様の贈り物として納得していたが、予想以上に大量で、一向になくならなかった。
- ③ 願った通りの物だったので僧は心浮かれてしまい、多くのことに大量に使ったことで、すぐになくなってしまった。
- ④ 期待以上であつたので僧は驚嘆し、神様の贈り物として大事に取り扱ったところ、当初の量そのまま減らなかった。
- ⑤ 願ったのとは大きく異なる物だったので僧は困惑し、見向きもしなかったところ、夢のように消え失せてしまった。

問九 文中の傍線部4（別にいときらきらしからねど、いとたのしき法師にてぞありける）の解釈として最も適当なものを、

次の選択肢の中から選べ。

38

- ① 特に世慣れているということではなかったけれども、たいそう機転の利く法師であった。
- ② とりわけ目立っているということではなかったけれども、たいそう裕福な法師であった。
- ③ さほど立派に見えるということではなかったけれども、たいそう聡明そうめいな法師であった。
- ④ そこまで華やかだったということではなかったけれども、たいそう陽気な法師であった。
- ⑤ 殊更に派手好きということではなかったけれども、たいそう道楽者の法師であった。

問十 次の説明文の空欄（X・Y）を補うのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んではならない。X 39、Y 40

『古本説話集』はその名称が示すように説話を集めた作品（説話集）である。説話集には、平安時代後期に成立し、近代に芥川龍之介の小説の素材ともなった『X』や、『Y』の作者として有名な鴨長明がへんさん編纂した『発心集』などがある。

- | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|--------|
| ① 万葉集 | ② 栄花物語 | ③ 今昔物語集 | ④ 平家物語 | ⑤ 日本書紀 |
| ⑥ 日本霊異記 | ⑦ 徒然草 | ⑧ 方丈記 | ⑨ 太平記 | |

次の
Ⅲの問題は、「国語(1)」の受験者が解答してください。(解答番号は 41 ～ 59)

Ⅲ

次の文章を読み、後の問い(問一～問十)に答えよ。(40点)

日本列島は誕生以来、地形は変わってもその位置についてはほとんど不動であるというのが地球科学の知見であるが、これを文化あるいは精神面から見ると、相当にその位置を変えていると考えてよい。遣隋使^{けんずいし}、遣唐使に見られるように古来中国文化の影響は大きく、江戸期までの一〇〇〇年以上にわたって日本列島は、時には急速に、時には静止したりしながら中国大陆を目指して移動していたものと思われる。よく欧米人の日本認識のいい加減さを象徴するゲンセツ^aとして「日本は中国にくっついてる国だと思っていました」とか「日本は中国大陆の半島にある国ではなかったのですか！」などが引き合いに出されるが、彼らの認識もひとつの真実といえるかもしれない。

明治期以降の文明開化、脱亜入欧思想は、それまでの方向性を一八〇度転換し、「日本列島丸」は中国に背を向け、太平洋をひたすら東へと航行することになる。むしろ中国大陆の方が、今度は日本列島を追って列島に近づいてきた時もある。とにかく、太平洋戦争期に一時的にその移動を止めたものの、戦後はそれを取り戻すかのように、1 加速度をつけてまた移動を始めたのである。

加藤(一九五五)はヨーロッパから帰国したばかりの新鮮な感覚で日本を観察し、その文化をいわゆる「雑種文化」と名づけた。関連する部分をいくつか抜粋する。

- ・西ヨーロッパで暮らしていたときには西ヨーロッパと日本を比較し、日本的なものの内容を伝統的な古い日本を中心として考える傾きがあった。ところが日本へ帰ってきてみて、日本的なものとは他のアジアの諸国とちがいで、つまり日本の西洋化が深いところへ入っているという事実そのものにもとめなければならぬと考えるようになった。
- ・雑種とは根本が雑種だという意味で、枝葉の話ではないということをはっきりさせておく必要がある。

・日本の伝統的文化を西洋文化の影響から区別して捨いだすなどということは、今の日本ではトウテイ^bできるものではない。ⁱ

この論文が出てからおよそ五〇年が経過している。この間に明らかになったことは、この雑種は決して「安定した」雑種ではなくて、全体としてはだんだんと西洋種に似てくる「移ろいゆく」雑種であったということであろう。衣食住の目に見える部分にとどまらず、社会制度や人々のものの考え方、人間関係の捉え方など、日本人の精神に関わる場所もそうである。これは、戦後のアメリカ的教育、あるいはアメリカ的「豊かな」生活様式の追求、そして現在では、国際化、グローバル化の中の経済社会のアメリカ化というものが大きく影響していると思われる。かつては「和魂洋才」という意味での雑種性が日本人のアイデンティティⁱであったが、「洋才」によって作られた環境の中でテキオウ^cしていくためには当然「洋魂」が必要であり、したがって「洋魂洋才」へ向けた流れは避けられなくなる。比喩的にいえば、現在の日本種は、当面は決して「洋魂洋才」にはなりえないが、「和魂洋才」の「和」を少しずつ「洋」へと取り換えていく連続的雑種のように見える。そしてこのことを言語の面から端的ⁱⁱに表現すれば、カタカナ語やアルファベット語の相対的增加が米欧化の尺度ということになるのではないだろうか。

さて、洋魂を追い求めるのであれば、目に見えるものや概念を洋風化するのに加えて、そのレットルとしての言葉も「洋風」にする必要がある。一般家庭でも「居間」は「リビング」になり、そこには「長椅子」ではなく「ソファア」があることになる。おそらく、われわれはリビングに入り、ソファアに座り、そしてそういうカタカナ語を使うことによって洋風の生活様式を本当にもにしたと感ずるのではないだろうか。² 翻訳語は在来の漢語や和語を用いるわけだから、その用をなさない。ここにカタカナ外来語の出番がある。ただし、カタカナ語は所詮ⁱⁱⁱ、外国語が日本語の発音習慣や文法によって濾過^{ろか}された「日本語」であり、本物ではありえない。物や技術の完全移転は容易でも、言葉や考え方を完全にコピーするのは相当に難しい。

ところで、丸山・加藤（一九九八）では、幕末から明治にかけて西洋の文物を日本に導入する際、なぜ「翻訳主義」を採ったのか、という加藤の問いに対し、丸山は「英語導入による国民の分裂を避ける、つまり上下同じ言語を用いることができる

ようにしたためだ」と答えている。江戸期の階級社会への強烈な反省が当時の知識人であったということが、翻訳主義をもたらしたことになる。ひるがえって現在を考えると、「中流」が多数派でかつ教育が行き渡った状況では、もはや翻訳主義に頼らなくとも国民の分裂は起きないという判断があつてカタカナ主義が隆盛を誇っている、と考えるのはうがった見方であらうか。

カタカナ主義への方向転換をもたらした要因はいくつかある。ひとつには柳父（一九八二）のいう翻訳語の「カセット効果」が有効でなくなってきたのではないかと思う。「カセット効果」とは、翻訳語は決して原語に等しい意味を持つものではないが、難しそうな漢字翻訳語には何か有り難くて重要な意味があるのだと受け手の側が思い込む効果のことである。たとえば、「個人」（↑individual）や「社会」（↑society）は、「中味が何かは分らなくても、人を魅惑し、惹きつける」「宝石箱」（カセット）だったというわけである。しかしながら、現在の状況を見てみると、漢字翻訳語はその **A** によってある程度意味が分かり、かつ硬く古臭い表現と映っているようである。宝石箱はかつての不透明できらきら輝いていたものから、半透明で中身が見えてしまい、かつ十分に年季の入ったものになってしまったようである。そして今や宝石箱の役割を果たすのはカタカナ語なのである。

日本人が相変わらず国民性として維持しているユーフェミズム志向（婉曲志向、曖昧志向）、すなわち物事をはっきりとわかないで、その意味を **B** に任せ、解釈は受け手の推察に期待するコミュニケーション傾向にとつて、漢字はもはや明瞭すぎるのである。ここにあまり（あるいはまったく）意味の分からないカタカナ新語が続々と誕生する根本的背景がある。石綿（一九八五）では、外来語表現の基底にあるものとして、新しい事物や考え方の表現、新しい感じの表現、今までのものと相違のある表現、専門化時代の専門語、国際化時代の影響、婉曲表現、言語構造に由来するもの、という七つの動機づけを挙げているが、その中でも、上述のように、「婉曲性」というものがその根源にあると考えられる。現代日本語においてカタカナ語は新しくて何かいいもの、という感じを持たせてくれるだけでなく、タブーを避ける方法としても十分に役割を果たしている。障害者や高齢者など、いわゆる社会的弱者に関することにカタカナ語がよく使われることから分かる。

さて、日本人がいつから新しいもの好きであったのかはよく分からないが、新しいものがありがたがり、古いものを「遅れている」と評価する価値観は、ひよっとすると文明開化とともに開花したのかもしれない。また、新しい外来物を在来の言葉で間に合わせようとしないう「新物新語」志向が、概念を細かく区別し、科学立国、ものづくり大国日本の原動力となっているという見方もできるかもしれない。そしてその新語が「新漢語」とならないのは、「日本列島丸」の舵が東に切られているという歴史的流れがあるからである。

第二言語や外国語の習得過程を考えると、そこには目標言語へ接近する間に不完全な形の習得段階が認められる。たとえば英語習得中の日本人の場合であれば、三人称単数現在の -s を付け忘れたり、複数形に思いが至らなかつたりする。これらは文法を合理的、経済的にしようとする人間の習得本能であつたり、母語の言語体系の カンショウ によつたりして生じてくる構造的で広範な不完全形なのである。言語習得研究ではこれを「中間言語」と呼んでいる。なお、現在の習得研究では、「中間言語」という概念には、習得の不完全さという否定的な意味はなく、**I** 当然通過すべき中間段階という肯定的な意味合いがある。

II 外来語とは、まさしく日本語という言語が欧米語（現在ではほとんど英語）を目標言語とし、とりあえず単語レベルで無数に造り出されている中間言語にほかならない。カタカナ外来語はその発音や語形（表記形）において、母語（日本語）の影響を受けた中間言語である。**III**、この中間言語に対してはネイティブとノンネイティブとでは、見る角度が反対になる。つまり日本人自身は英語を借用して「**X**」したものと見ているが、外国人の目から見ると、これは日本語の「**Y**」のひとつと映っているのである。

前述したように、古来より江戸期までは日本語は漢語化の中にあつた。漢字を借用し、それを日本語化する際に、やはり中間言語（発音や意味の日本語化など）が造り出され、もはやそれは漢語として日本語の一部となつている。それが、幕末から明治を経て大正期になると、西洋カタカナ外来語が急激に増加する。いきなり明治期から「カタカナ主義」にならなかつたのは、おそらくこの時期がそれまでの漢語化からカタカナ外来語化への変化の過渡期であつたからであろう。非常に大局的にい

えば、文明・文化の乗り換えと言語の乗り換えには時差があったということである。その意味で、和製漢語を大量に造り出した明治期は、いわば「洋才」に対して「漢才」（漢語）で対応していた折衷期ともいえる。つまり、よくいわれる江戸期までの「和魂漢才」と明治期以降の「和魂洋才」を取り持つ時期と考えられるのである。

（陣内正敬『外来語の社会言語学』による）

注 加藤（一九五五）——加藤周一の論文「日本文化の雑種性」（一九五五年）。

丸山・加藤（一九九八）——丸山真男・加藤周一の著書『翻訳と日本の近代』（一九九八年）。

柳父（一九八二）——柳父章の著書『翻訳語成立事情』（一九八二年）。

石綿（一九八五）——石綿敏雄の著書『日本語のなかの外国語』（一九八五年）。

問一 文中の二重傍線部（a～d）のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a ゲンセツ

- 41
- ① 費用をセツ半する
 - ② 外国文化をセツ取る
 - ③ セツ速に事を進める
 - ④ セツ操のない振る舞い
 - ⑤ セツ得力のある主張

b トウテイ

- 42
- ① 海テイに沈む宝
 - ② 旅テイを変更する
 - ③ 株価がテイ迷する
 - ④ 刑法にテイ触する行為
 - ⑤ 議論の矛盾点が露テイする

c テキオウ

- 43
- ① 脱税をテキ発する
 - ② 電車が警テキを鳴らす
 - ③ 操縦士としてのテキ性を見る
 - ④ 一テキも残さず飲み干す
 - ⑤ 実力は彼女に匹テキする

d カンシヨウ

- 44
- ① カン線道路を整備する
 - ② 車列のカン隙を縫って進む
 - ③ 一つ目のカン門を通過する
 - ④ 対立する両国のカン衝地帯
 - ⑤ 湿地をカン拓して造った農地

問二 文中の波線部 (i)～(iv) のここでの意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

i アイデンティティー

- 45
- ① 一般概念
 - ② 民族精神
 - ③ 応用能力
 - ④ 存在意義
 - ⑤ 自己認識

ii 端的に

- 46
- ① おおざっぱに捉えて
 - ② 一部分だけ取り出して
 - ③ 要点だけをはっきりと
 - ④ 別の観点からながめて
 - ⑤ 本当の所をあからさまに

iii 所詮

- 47
- ① 否が応でも答えるべきことには
 - ② 本当のところは計り知れないけれども
 - ③ あれこれと論じても行きつくところは
 - ④ 分かって分かってまいが関わりなく
 - ⑤ 受け入れられようと拒まれようととにかく

iv 年季の入った

- 48
- ① 長年とても丁寧に使われている
 - ② 古来の経験と知恵が詰まっている
 - ③ 手間ひまをかけて作られている
 - ④ 長い間使われて古びてきている
 - ⑤ すっかり役割を終えている

問三 文中の空欄(A・B)を補うのに最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | 49 | ① | 蓋然性 | ② | 確実性 | ③ | 一貫性 | ④ | 表意性 | ⑤ | 多義性 |
| B | 50 | ① | 話し手 | ② | 辞書 | ③ | 文脈 | ④ | 慣用 | ⑤ | 翻訳 |

問四 文中の空欄(IⅠⅢ)を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。I 51、II 52、III 53

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | あるいは | ② | そのうえ | ③ | けれども | ④ | たとえば |
| ⑤ | ちなみに | ⑥ | つまり | ⑦ | なぜなら | ⑧ | むしろ |

問五 文中の空欄(X・Y)を補うのに最も適当な組み合わせを、次の選択肢の中から選べ。

54

- | | | | |
|---|-------|--|--------|
| X | Y | | |
| ① | 漢語化 | | カタカナ語化 |
| ② | 雑種化 | | 純粹化 |
| ③ | 日本語化 | | 英語化 |
| ④ | 完全化 | | 不完全化 |
| ⑤ | 目標言語化 | | 中間言語化 |

問六 文中の傍線部1（戦後はそれを取り戻すかのように、加速度をつけてまた移動を始めた）とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

55

- ① 日本は、古くから自ら中国に学び、中国文化の影響を強く受けてきたが、太平洋戦争の後、一時停滞していた中国との交流を以前にも増して深化させていったということ。
- ② 他国への文化的接近を繰り返してきた日本は、太平洋戦争が終結すると、アメリカをはじめとする西洋文化への接近を再開し、以前にも増して貪欲に取り入れていったということ。
- ③ 古代には中国文明の文物を取り入れ、明治期には西洋文化のメリットを享受しながらも、太平洋戦争の後、日本は独自の在り方を取り戻そうと国を挙げて取り組んでいったということ。
- ④ 中国に物理的にくっついた国だと捉えるような西洋人の誤解を解こうとして、太平洋戦争後の日本人は、文明開化の時代にも増して自国の発展にまい進していったということ。
- ⑤ アジア全体にわたって、旧弊にとらわれた人々を解放し、先進文化を興隆させようとした明治期の活動を、太平洋戦争後の日本は再度推し進めていったということ。

問七 文中の傍線部2（翻訳語は在来の漢語や和語を用いるわけだから、その用をなさない）とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

56

- ① 日本の文化の中には西洋的なものがすでに深く入り込んでおり、翻訳語である漢語や和語は伝統的な日本文化と輸入された西洋文化の区別を難しくしてしまうから。
- ② 戦後の日本には、衣食住にとどまらず社会制度やものの見方までアメリカ文化が浸透しており、言葉だけ漢語や和語を用いても欧米化を抑えることは不可能だから。
- ③ 外来語である「リビングのソファ」ではなく「居間の長椅子」と日本語の語句で表現してはじめて、「和魂洋才」を具体的に示したことになるから。
- ④ 漢語や和語を用いた翻訳語では洋風の生活様式を直接表現することができず、これらの語彙によって西洋の生活様式に宿る精神を自分のものとすることはできないから。
- ⑤ 「リビングのソファ」とカタカナ語を並べてもやはりそれは「日本語」であり、これを直接英語で表現してようやく「洋魂洋才」を実践したことになるから。

問八 文中の傍線部3(へうがった見方)とあるが、それはどのような見方か。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

57

① カタカナ主義が隆盛を誇っているのは、国際化、グローバル化が急速に進展する中で、国際社会で生き残っていくためには社会階層の上下を問わず誰もが英語を習得する必要がある、カタカナ語はその大事なきっかけになるからである、とする見方。

② カタカナ主義が隆盛を誇っているのは、社会制度から生活様式に至るまであらゆる面でアメリカ化が進み、誰もが一通り英語を操ることができるようになったため、英語を直したカタカナ語を多用しても何ら問題は生じないからである、とする見方。

③ カタカナ主義が隆盛を誇っているのは、かつての中国語に取って代わって英語が世界語となっている今日の状況では、国民各層が英語導入の是非について対立し分裂するといったことは、もはや想像できないと考えられるからである、とする見方。

④ カタカナ主義が隆盛を誇っているのは、現在では教育が普及して一定の知識と教養を持った人々が多数を占めるようになり、広くカタカナ語が用いられても、これになじむ層となじまない層という社会的分断は生じないからである、とする見方。

⑤ カタカナ主義が隆盛を誇っているのは、従来の日本語は漢字とひらがな、外来語はカタカナによって書き表すとした伝統的な作法が影を潜め、社会のどの階層にあっても多くの人が書きやすいカタカナを用いるようになったからである、とする見方。

問九 文中の傍線部4（今や宝石箱の役割を果たすのはカタカナ語なのである）とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

58

① 古来、中国のさまざまな見知らぬ文物が取り入れられた際、それを表す漢語という言葉そのものも宝石箱のような美しく魅惑的な輝きを放っていたが、今日のグローバル化、アメリカ化の流れの中でその役割はすっかり英語に移ることになった、ということ。

② 元来、人々を魅了する言葉は世界語である英語なのだが、明治期の一般庶民に英語がそのまま通じることはなく、これが日本語のしくみに合うように変化して定着したカタカナ語が、今日多様な意味を含み込んで魅惑的な宝石箱の役割を果たしている、ということ。

③ かつて西洋の新しい概念を、中身がよく分からなくても魅力あるものと見せる役は、新しい漢字翻訳語が担っていたが、今日では、英語をそのまま直したカタカナ語が、意味はよく分からないが新しい感覚のある語としてその役を担うようになった、ということ。

④ 漢字表記の漢語が意味を明示するのに対して、カタカナ語は指す事物や考え方の新しさや専門性だけでなく、直接言及するにははばかられる事柄を言い表すものとして大変都合がよく、今日魅力的で輝きを放つ言葉として広く人々に使われている、ということ。

⑤ 主に紙媒体に頼っていた近代までとは異なり、現代は世界の最新情報が電子媒体ですぐに把握できるのであって、漢字翻訳のような煩わしい手立てを講じるまでもなく、新しくて人を惹きつける情報をカタカナで容易に手に入れることができる、ということ。

問十 文中の傍線部5〈和製漢語を大量に造り出した明治期は、いわば「洋才」に対して「漢才」（漢語）で対応していた折衷期ともいえる〉とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

59

- ① 明治期は、なじみのない西洋の概念が次々と紹介され、日本の言語文化と折り合いを付けながらこれを広めるには従来の漢語に新たな意味を付け加えるのが最善の策だとして、多義語が増加した時期であった、ということ。
- ② 明治期は、中国文明の文物を取り入れるのに漢語を用いた江戸時代までの方法を応用して、西洋文明の文物に新たな漢語を作って当てはめ、新しいものや思想をうまく日本社会になじませた時期であった、ということ。
- ③ 明治期は、中国にはない、欧米の新しい多様な文物を言い表す言葉そのものを一から作り出す必要に迫られ、中国の学者や知識人の手を借りながら新たな漢語を大量に生み出した時期であった、ということ。
- ④ 明治期は、押し寄せる西洋の事物の名前を仮名書きにしたいくない知識人がどうにか漢字で書き表そうとした時代であり、漢字の音読みを利用して海外の地名や人名まで漢字表記にした時期であった、ということ。
- ⑤ 明治期は、外国の文物を書き表すのに、漢字を正当とする書き手と、表記の容易な仮名を良しとする書き手が共存しつつも、前者の漢語使用者が徐々にカタカナ語使用者に追いやられていく時代であった、ということ。